常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年１月２２日(金)
その２

◇ 玄関から見える景色

茜色の衣をまとった玄関前のドウダンツツジもすっかり葉を落とし、玄関前の景色はすっかり寂しくなった。

東側の景色もごらんのとおり。

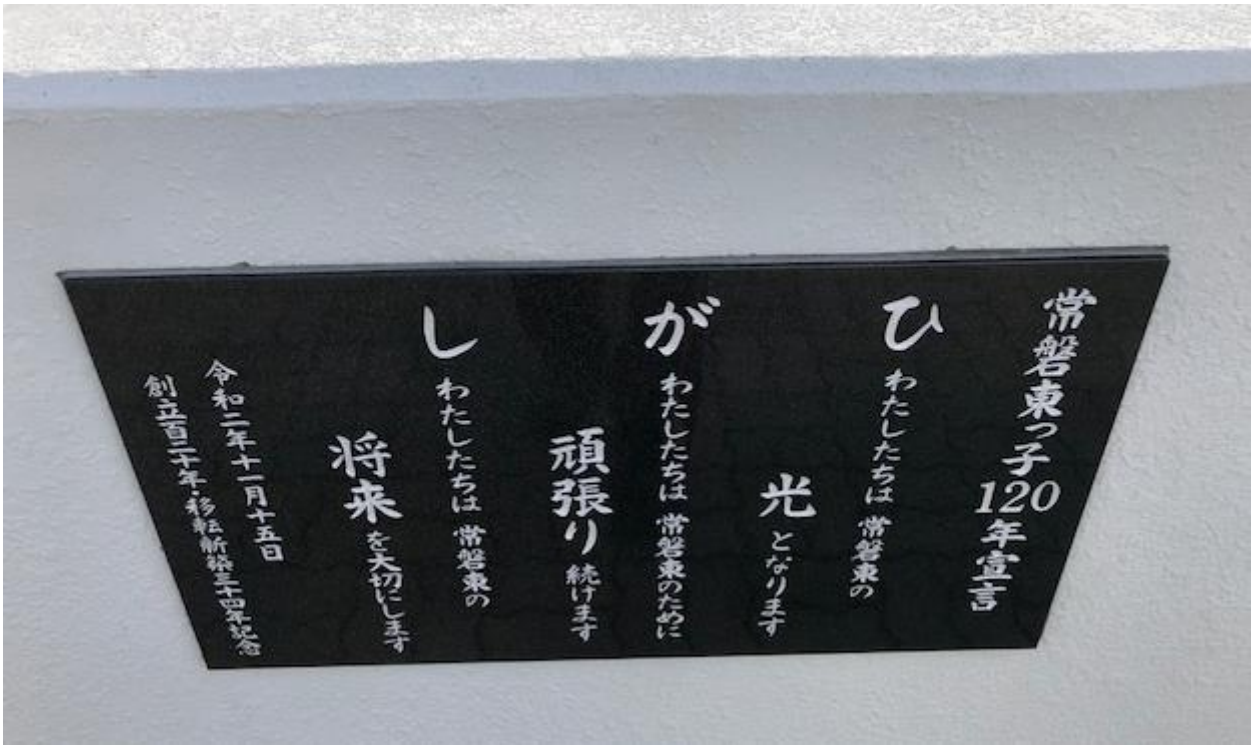
葉を落とした広葉樹の幹の白さが、いい塩梅で雪模様を描いているよう。

一方、西側の景色。
新しく加わった役者が、こちらもいい塩梅で景色を彩り、景観をぎゅっと引き締める。

新しい役者とは、創立 120 年記念石板碑【常磐東っ子 120 年宣言碑】である。
白亜の壁に黒御影石の石板。白と黒のコントラストが、これまで以上に正面玄関の彩りを華やかにしている。
春になれば、ドウダンツツジの緑。そして白と黒。
秋になれば、ドウダンツツジの赤。そしてモノトーン。今から楽しみである。

この記念石板碑は、式典実行委員の幹部の方の取り計らいで作っていただいたものだ。
昨年の 12 月 22 日に工事を行い、お披露目は２学期の終業式。とてもよい令和２年の締め括りとなった。

石板碑をこの位置に配置したのには理由がある。子供たちが登校時にさくら階段を上りながら正面に見えるのが「求めてはげむ」の校訓碑。続いて階段を右手に折れたところに見えるように考えた。校訓と宣言で力を蓄えるわけだ。



【常磐東っ子 120 年宣言文】

ひ　わたしたちは　常磐東の光となります

が　わたしたちは　常磐東のために頑張り続けます

し　わたしたちは　常磐東の将来を大切にします

学校だけではない。
生涯にわたって故郷を愛し、大切にし、貢献する。
これが宣言の意図するところだ。

卒業しても、高校生になっても、社会人になっても、年老いても、
常磐東学区の光となってくれることを願う。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年１月２９日(金)
その１

◇ 児童用ロッカーの話❶

まず写真をご覧いただこう。教室後方の児童用ロッカーを撮影した写真である。

＜◎年生＞

＜◆年生＞

＜□年生＞

＜★年生＞

＜☆年生＞

＜▼年生＞

＜1/21(木) １限時　予告なしに撮影＞

ロッカーに納めるランドセルの向きや個人の水筒を置く場所など、各学級の「きまりごと」はある。しかし、大事な部分は６学年に通ずる共通事項があるということ。ロッカーの状態(写真)を見れば、分かっていただけることだろう。

学校では、１年が修了すれば、当然のことながら学年が１つ上がる。本校のような学年１学級の小規模校では、新年度を契機に学級担任が変わることも多い。
担任が変われば、当然のことながら指導法も変わるわけで、小さな「きまりごと」の変化はある。大切なことは、「指導の本筋が１本」であること。つまり、「指導の本筋が同じであること」だ。

本筋の変化は子供を混乱させ、子供を困らせる。困るのは指導する教師ではなく、学校生活を送る児童なのである。

本校は、この「指導の本筋」「指導の根幹」がしっかりしている点が大変よい。６名の学級担任間のコミュニケーションが取れ、連携が図られている証でもある。

★共通事項：【整頓を重視】していること
　学級を落ち着かせる最重要事項は、子供が生活する教室を整えることである。「ゴミが落ちている」「物品が整頓されていない」教室は、子供の心を荒（すさ）ませる。よって、「きれいで当然」「整えて当然」の意識を育ませ、実践させることが学級を安定させる鍵となる。

　だから中学校での担任時代は、徹底的に公共の場である「教室の整頓の意識」を高めるよう指導した。
　生徒用ロッカーで言えば、体育館シューズを入れる袋の整頓。紐を手前ではなく、奥に向ける。納めるのも、取り出すのにも一手間要るが、一手間要ることが重要なのだ。無造作に「ぽん」と放り込んだのではなく、整える意識がないとできない。さらに、見た目が全く違う。紐が手前にあると、いびつな形状の袋の紐がロッカーからだらりと下方に落ちるのがほとんど。

　30 のロッカーがこの状態だと、見られたものではない。引っ掛かりやすいから、安全性にも問題が残る。こうした教室で過ごして居れば、見る間に生徒の心が荒んでいく。反対に１つだけなら、その１つが目立つ。目立つからいいのだ。

　目立つから、意識して実践している多くの子供の誰かがそっと直す。意識しているから、その直し方も丁寧だ。中学生ともなれば、ロッカーの状態を見て、誰かがやってくれたことに気付く。そうすると、こちらが何も言わずとも実践するようになる。

　変化に気付かない生徒も稀にいる。しかし、しばらく続けていれば、気付く時が来るのがほとんどだ。それでも気付かなければ、ここが教師の出番。ずっと学級の誰かがやってきたことを当人に伝えてやればいいのだ。こうして事実を知った生徒は、間違いなく大きく変わる。
　これが【自浄】なのである。

　対して、小学生にはしっかり教えることが指導の鍵となる。しっかり教えて、丁寧に指導していく。そうすると知らないうちにできるようになる。意識しなくとも、無意識でやれるようになる。だから小学校の担任は、根気・粘り強さが必要。そして、これができるところが、本校担任陣の力量の高さと言える。

　下段左の★年生。３人の児童とも、ランドセルの肩紐を意識して子供がロッカーに納めたことが分かる。担任の継続・徹底した指導の跡が見える。
　上段左の◎年生と下段右の▼年生の写真。ランドセルに付けた防犯ブザーが落ちないように子供が対応したのだろう。子供の丁寧な心遣いが見える。

　そして何より、６学級に統一感があるのがいい。同一学級のように見える。
　この統一が「指導の本筋・根幹」であり、担任が変わったところで子供を混乱させないし、６年間の継続した指導がプラスの習慣を身に付けさせるのである。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年１月２９日(金)
その２

◇ 児童用ロッカーの話❷

もう一度、写真をご覧いただこう。

＜◎年生＞

＜★年生＞

＜□年生＞

★共通事項　その２：【ロッカーの利用方法】

ご覧のように本校では、全学年とも児童用ロッカーを個人で３か所使用できる環境（縦１列の使用環境）にある。小規模校がもたらすこの環境があるがゆえに「登校時の持ち物の軽量化＝置き用具」を断行できた。

写真に見るロッカーの使用状況から、担任の連携が窺い取れる。最上段はランドセル。最下段は絵の具セットや習字道具、体育館シューズなど、机中に収納できない個人持ち物。そして ２ 段目が置き用具と使用方法の統一が図られている。

さらに、置き用具の２段目に着目すると、右の写真のように、教科書等が整頓しやすいように箱に入れてある。この箱、実は「お道具箱の蓋」である。授業で常時使用するお道具箱は机の中だ。
蓋がないので管理は大変だが、これも仕方なし。かえって使い易さは向上するかもしれない。

なぜ「お道具箱の蓋」を利用するのか。担任たちと話をすると、そこには担任だからこそ気付く理由があった。

置き用具を行う以上、先日の夜もしくは翌朝に行っていた「学習用具の整え」を登校後に教室で行う必要が生じる。というより、やらせるべきだと考える。
授業準備は、生きる力を養う大切な習慣である。これを取り除いてしまうのは、かえって子供の伸長を止めることにもつながる。

そこで、朝の段階で「自分で必要な用具を整える」のである。

準備するのを忘れて、あわてて授業中に用具を取りに行くのは論外。指導を受けるのは当然だ。「わすれました」「すいません」と担任に伝え、次に同じ過ちをしないように段階を踏ませる。すると、「失敗」が【経験】に変わる。

授業直前の休憩の時間を使って準備をするのもよくない。その場しのぎは、マイナスの経験と姿を変える。
しかし、自分で気づいて取りに行くのは別。あらかじめ授業の準備をして確かめている行為が加わる。そして失敗しないように対応する。これはプラス経験。

だから、朝、登校したところで、登校時に持参した持ち物と置き用具とで「自分で必要に用具を整える」。これまで家庭で行ってきたことを学校で行えばよい。

その際、置き用具を取り出しやすく、持ち運びやすくするために、「お道具箱の蓋」を利用するのである。

用具揃えを行う上で、背表紙が見えて確認できるのならまだしも、２段目のロッカーで棒積みになっている教科書等から必要なものだけ選（よ）るのは、高学年でも難しい。

子供が全てをロッカーから出して、自分の机で用具を整えることを担任は想定し、ひとまとめで対応できる箱の利用を思いついた。

箱であれば、箱のふちに指をひっかけて手前にさっと引き寄せることもできる。
箱をしまう時も、箱の一部をロッカーに引っ掛け、そっと押し込めばよい。

なるほどである。

これなら、自分の机で準備ができる。床の上で教科書を並べたり、ロッカーの上を使って共用スペースを独り占めしたりすることもない。

子供の動きを想定しつつ、さらに効率的な方法を考えた。
そして共有する。すると「学校のきまり」となる。

さて、本日で２週間の試行期間は終了。しかし、持ち物の軽量化＝置き用具はマイナーチェンジを経ながら継続的に行っていく。

また、新たなアイデア手法が加わるかもしれない。
子供たちから提案があれば、最高である。

常磐東小学校　校長だより

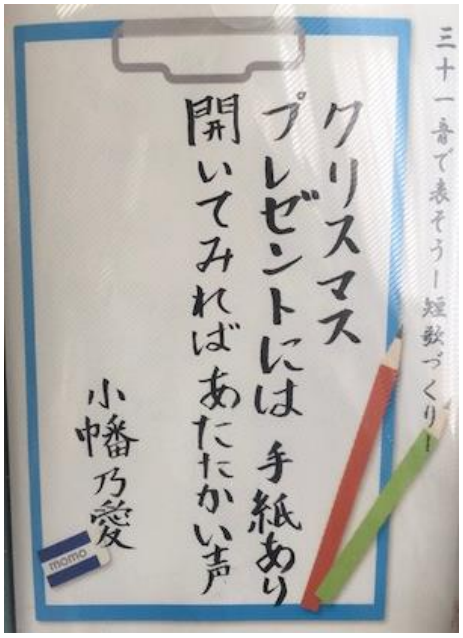
常なる磐

つねなる　いわ

令和３年１月２９日(金)
その３

◇ 児童用ロッカーの話（おまけ）

５年生のロッカーの撮影で、出来たてほやほやの掲示を見つけたので掲載する。

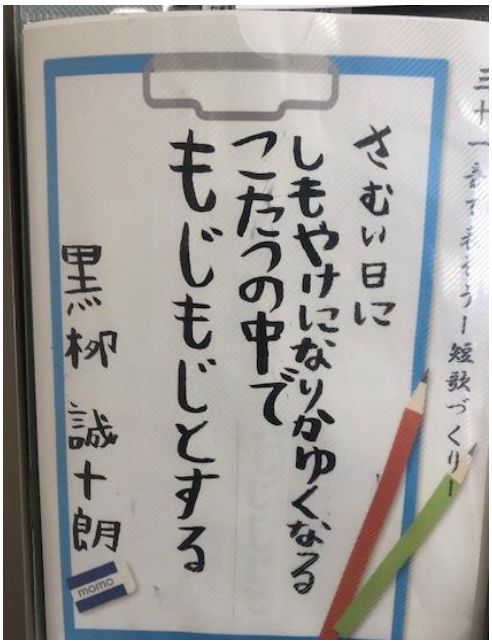


川柳かと思ったら
ちゃんとした短歌。

季語「クリスマス」
「こたつ」もある。

二句とも、場面が
思い浮かぶのがよい。

筆ペンもいい。
文字に味わいがある。



１年生の教室では、こんな場面に遭遇。

保健室から
「お布団」と「赤ん坊人形」を借りてきて…

教室後方で「おままごと」と思いきや、
とても素敵な学習だった。

特別の教科
「道徳」

【いのち】
の学習

挿絵にそっくり。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年１月２９日(金)
その４

◇ つながるということ

先日の 27 日のこと。
社教委員長の中根良夫さんが１枚の手作りの用紙をもって来校された。
自分は外部対応で席を外しており、帰校後、教頭から用紙を受け取った。

そこには、新聞記事（下記）と「常磐東っ子 120 年宣言」が貼付されており、記事の表題で中根さんが何を伝えたかったのかが理解できた。

新聞記事は、バイデン大統領の就任式で詩人のアマンダ・ゴーマンさん(23)が朗読した自作の詩に、世界中から賞賛が集まったというもの。
新聞の表題は「光は常にある。光となる勇気があれば」。

アマンダさんの詩と 120 年宣言文のつながりを察する。
さらに、日本語訳した詩に【常】を見つけた。常磐の【常】と解釈する。

つながりは、価値付けである。　「つなげる」のである。
自ら価値付け、つなげて、身体の底から無形の力が湧き上がるのを感じた時、もう一歩前に進もうとする勇気も生まれる。
ここにもつながりがある。

下記に新聞記事、そして裏面に詩の日本語訳を掲載した。
新たな「つながり」が見つけられるはず。

◆中日新聞　令和３年１月 23 日　２面

「光は常にある。光となる勇気あれば」米大統領就任式で朗読

22歳詩人アマンダ・ゴーマンさん

米連邦議会議事堂で20日（日本時間21日未明）に行われたバイデン大統領の就任式で、注目をさらったのが自作の詩を朗読した詩人アマンダ・ゴーマンさん(22)＝写真、ＡＦＰ・時事＝だ。就任式に出た歴代の詩人で最年少。分断や不安に覆われた時代に、結束し未来へ歩もうと呼び掛け、堂々としたパフォーマンスに、世界中から称賛が集まった。

詩は「私たちが登る丘(The Hill We Climb)」。議事堂の一帯は通称「キャピトル・ヒル」と呼ばれている。バイデン氏の就任演説に続いて登場したゴーマンさんは、「私たちが託された国より、ずっとよい国を未来に残そう」「私たちは再建し、和解し、立ち直る」と訴え、「光は常にある。私たちがそれを見る勇気、光となる勇気さえあるのなら」と呼び掛けた。

（小嶋麻友美）

一日が始まると、自分に問いかける
この終わりのない暗がりのどこに光は差しているのかと

私たちは喪失感を抱えながら海原を進まねばならない
私たちは窮地にも勇敢に立ち向った

静寂は必ずしも平和ではなく
正しいとされる常識や概念がいつも“正義”とは限らない
それでも知らぬ間に夜は明ける
どうにかそれをやり、どうにかやりすごし
そして目の当たりにした
壊れていないけれど、ただ未完成の国を

私たちはこの国と時代の継承者だ
ここでは奴隷の子孫で、母子家庭で育ったやせた黒人少女も
大統領になることを夢見ることができる
気づけば彼女は今、大統領のために詩を読んでいる

私たちは完璧じゃないしピカピカではないけれど
完璧な国家を築くために努力していないということではない
目的に向かって団結し
どんな文化も肌色も特徴も状態も受け入れる国をつくる
だから私たちは上を向いて
私たちを隔てるものではなく
私たちに立ちはだかるものに目を向ける

分断をなくす
未来を最優先するなら、違いを超えなければならないから
武器を置く
そうすれば、その手を差し伸べることができるから
誰も傷つけず皆が調和できるように
せめてこれは真実だと世界中に言わしめよう

悲しみながらも私たちは成長した
傷ついても希望を捨てなかった
疲れても挑んだ私たちは永遠の絆で結ばれている
勝利だと言えるように
二度と敗北をしないためではなく
二度と分断の種をまかないために

誰もが平和で豊かに何も恐れることのない世界を思い描こうと
聖書は説く

私たちが今の時代に応えるなら
勝利は刃の中ではなく、私たちが築いたすべての橋にある
それが、私たちがのぼる丘への約束
私たちに勇気があれば、アメリカ人であることは
私たちが受け継いだ誇り以上のもの
それは足を踏み入れた過去であり、いかに修復するかということ
国を分かち合うより、粉々にしようとする力を見せつけられた

国を壊し、民主主義を滞らせようとする試み
それは現実になりかけた
民主主義は一時的に止まることはあっても
敗北することは永久にない

この事実、この信念のうちに
しばし私たちは未来を見つめ、歴史は私たちを見つめる
今は贖罪の時代だ
私たちはその始まりに恐怖し、このような恐ろしい時代を受け継ぐ
準備ができていないと感じていた
しかし、その中で、私たちは新たな一章を記す力を見いだし
自分たちに希望と笑いをもたらした

どうしたら大惨事を乗り越えて打ち勝つことができるかと
問うたこともあるが
今は
大惨事が私たちを乗り越えて、打ち勝つはずがないと断言できる
私たちは過去には戻らず、未来に歩みを進める
国は傷を負っているが、
一体となって、慈悲深いが勇敢で、力強く、自由だ
私たちは脅しに振り回されたり、邪魔されたりしない
何もしないことや惰性で動くことが、
次の世代に引き継がれ、未来となることを知っているから
私たちの失敗が次の世代の重荷になる

ただ1つだけ確かなことがある
慈悲と力、力と正義が融合されれば、
博愛こそが私たちの遺産となり
変革こそ子どもたちの生まれながらの権利になる

だから私たちは、受け継いだ国よりも良い国を残そう
高鳴る胸で呼吸するたびに、
傷ついた世界を素晴らしき世界に変える
私たちは西部の黄金の丘から立ち上がる
祖先が革命を実現させた
風が吹き荒れる北東の地から立ち上がる
湖に囲まれた中西部の町から立ち上がる
太陽が照りつける南部から立ち上がる
私たちは再建し、和解し、回復する
国と呼ばれる、あらゆる場所で、多様で美しい人々が立ち上がる
打ちのめされても美しい人々が、一日が始まるとき
私たちは真っ赤な炎のように輝き
恐れることなく暗がりから抜け出す
私たちが解き放てば、新たな夜明けは花開く
光は常にそこにある
私たちにそれを見る勇気があれば
私たちに光になる勇気があれば

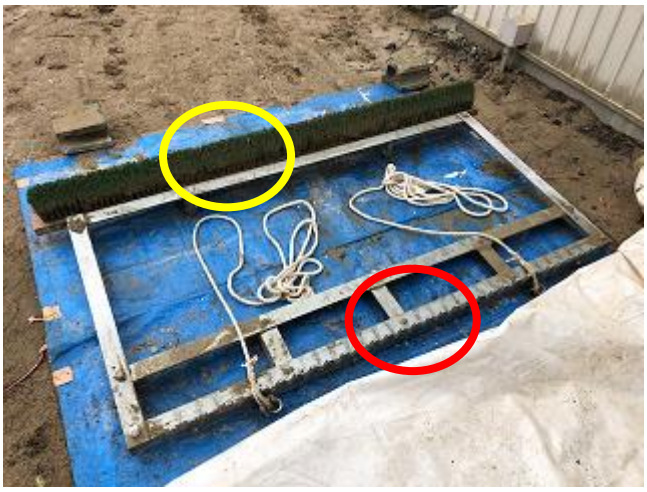
常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年２月５日(金)

◇ 秘密兵器



右の写真の器具を購入した。
「根こそぎ君」と名付けた秘密兵器は、学校の【救世主】になるかもしれない。

秘密兵器について簡単に説明しよう。
器具だけでは、ただの重い代物だが、これをロープで軽トラックにつなぎ、さらに器具に「重し」を載せて走らせる。

器具の手前側は金属製の爪（赤〇）が付いており、後方はブラシ（黄色●）がある。
つまり、器具を装着した軽トラックでグラウンドを走行させることで、爪が地表の凸の部分を削り、ブラシで均（なら）す「地均し器」というわけである。

しかし、本校の使用方法（使用目的）は、他校と少々異なる。
グラウンド全体を張り巡らした「芝系雑草の対応」である。

ひと昔、ふた昔前のこと。学校のグラウンドの端の方に芝や芝系の草を定植することが流行った時期がある。見た目のよさに加え、子供の安全面を視野に入れた対応である。本校もそうした流れの中で対応したであろうことが推察される。

けれども、本校は少し環境が違い、当初の計算を狂わせる。
環境がよいだけに成長は早い。当初はグラウンドの端の方だけであったはずだが、グラウンド中央に向かってどんどん伸びる。芝は地下茎でつながっているため、地表の見かけでは分からないが、ものすごい勢いで伸び、まさに網目状につながっている。

夏季になると、本校のグラウンドが緑色になるのは、この芝系雑草である。
毎年、年に何度も寿会や保護者の方に草取りを行っていただき、一旦はきれいになるのだが、先に述べたように地下茎でつながり、生命力の強い雑草はびくともしない。瞬く間に芽を伸ばす。
さらに他の雑草も繁殖して対応しようとするが、この芝系雑草が草取りを邪魔する。本当に厄介な存在なのである。

そこで、本年度対応したのが「除草剤」。これは、他の雑草には効果てきめんだが、芝系雑草はこれまたしぶとい。冬季になっても、葉の色は変えるものの、地下茎を手繰るとしゃんとしている。来春の生長に向けて、着々と準備しているようだ。

そう、地均し器を【草取り秘密兵器】として利用するのである。

１日に２～３時間。４日間作業をした結果が下の左写真である。

右の写真は、ベンチを境に左側がトラックを走らせられなかった部分、右側が作業をした部分で、その違いを分かっていただけるのではないだろうか。

確かによくなったように見える。見違えるほどと言っても憚（はばから）らないが、何十年もかけて成長した植物の生命力を舐めてはいけない。
名前のように「根こそぎ」とはいかない。別名「表面ちょろちょろ君」である。

けれども、作業による「別の効果」を期待している。

本校が他校のようにグラウンド中央まで地下茎を伸ばすのには理由がある。
どれだけ子供たちが走り回っても、地を踏みつける回数が違う。つまり、雑草に与える負荷の違いである。

対応法は、人の代わりにトラックが走る。走り続けるのである。

本校のグラウンドは舐めてはいけないことを知っている。何もしなければ、またグラウンドが緑色に変わるのは目に見えている。

だから、とても毎日とはいかないが、週に一度は対応すると決めた。

冬の成果は春に現れる。雑草に負けない粘りで頑張るしかない。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年２月５日(金)

その２

◇　【検討中】来年度のクラブ活動に関わる対応について

　月曜日の日課。下学年はそうでもないが、上学年は本当に慌ただしく、忙しい。だから、本当によくやっている。

　委員会活動が設定されているときは、特に甚だしい。
　５限授業の後、クラブ活動、委員会活動、そして休む間もなく鼓笛練習へと移る。６限のクラブ活動は、移動や準備、片付け、着替えも加わる場合もあるのでなかなか大変だ。しかも、週の始まりの月曜日。子供たちも、教員も、本当によく頑張っている。

　けれども、全て重要な活動で、何かを取り除くわけにはいかないのだ。
　知恵を絞り、「外せない活動価値ありき」という見方で活動を残していくと、クラブ活動のみ手が入らなかった。

　このクラブ活動。文部科学省告示の学習指導要領で区分けすると、学級活動や児童会活動（委員会活動）と同様に特別活動に属する。よって、制約が極めて少なく、学校の自由度が高い。さらに、学習指導要領で示すクラブ活動の目標は、「異年齢交流による集団活動を通した資質・能力の向上」をねらいとしている。

　そこで考えたのが、クラブ活動の持ち方の変更である。

　現在行っている鼓笛活動こそ、異年齢交流の極み。しかも、以前に校長だよりで伝えた（裏面に再掲載）ように、鼓笛活動こそ、学習指導要領が示す「クラブ活動の目的」を満たしているのだ。しかも、学んだことを発表する機会もある。

　現在は、教員が講座を設け、子供たちが講座を選択する形式をとっているが、この方式を変えることを検討している。

【鼓笛クラブ】に一本化することで、鼓笛練習・技術習得の時間をこれまで以上に確保できるとともに、質を高められると考えた。加えて、子供たちの自己肯定感や充実感、達成感も高められると考える。

　もちろん裏面で再掲載したように、「受け渡す」思いも大きくなるに違いない。

令和２年１２月１８日発行号

◇ 受け継ぐ　ということ　　受け渡す　ということ　より抜粋

（前略）

記念式典以降、昼放課は校歌演奏の練習がずっと続いている。大したものだ。
褒め、讃えることができる部分は、継続して行っていることのほかにある。
それは、練習に取り組む５・６年生の姿勢。まさに、姿から真剣味が伝わってくる。
寄り添い、手取り足取り、自分が備えた技を伝授する６年生。そのエネルギーを真正面から受け止め、自分のものにしようと努める５年生。真剣勝負である。

６年生のエネルギーは、自分が演奏に注ぎ込んできたエネルギーだけではない。
今、中学校に通う中１の先輩から授けてもらったエネルギーが加わっている。
教えてもらったことを教えていく。伝えてもらったことを伝えていく。
本校が長い年月をかけて醸成してきた伝統がそこにあるのだ。

５年生に伝わり、５年生が受け止めることができるのには理由がある。
１年に及ぶ合同練習を通し、６年生が鼓笛演奏にかけてきた情熱の熱量を感じ、知っているからである。
受け継がれてきたものを「受け継ぐ」責任がそうさせるのだ。これも伝統だ。だから、教員は付きっ切りでなくてよい。見守ればよい。
なぜなら、そこに子供たちの【自主】が存在するからである。

タイトルには、敢えて「引き渡す」ではなく、【受け渡す】と書いた。
「引き渡す」というのは、自分の手元にあるものを、ただ相手に「渡す」行為。
「受け渡す」のと、全く意味を異にする。
「受け渡す」とは、相手に「渡す」だけでなく、相手からも何かを「受け取る」ことを意味する。

６年生は技を伝え、思いを託すだけでなく、５年生からもらっているものがあることを忘れてはいけない。
６年生の思いに応える【５年生の思い】である。

５年生に渡しているようで、実は５年生からいただいている。
その時はよく分からないが、あとになってよく分かる。でも、それでいい。

授ける(さずける)という字に【受（ける)】があるのは、そういうことだと思う。

（後略）

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年２月５日(金)

その３

◇ 登下校時の持ち物❺

２週間の「登下校の持ち物軽量化試行期間」を終えた。
いまのところ順調である。

試行開始の１月 18 日に「置き用具の臨時集会」を行った際、生活指導担当者から【４つのきまりごと】が示された。

① 持ち物には、全て記名をする。
② 置き用具は、自分でよく考えて計画的に行う。
③ 困ったときは、担任の先生に相談する。
❹ わるいことはしない。

いずれも端的で子供がわかりやすく、たいへんよくできた「きまりごと」だ。

①の記名は、常々指導されていること。その再確認であるとともに、所有物自己管理の基本中の基本である。

②の大切なところは、「自分で考えて」という部分。これが見通しをもつ力の育成と自己責任の自覚につながっていく。生きる力の大切な要素である。

③「困ったとき」の学校での対処法を伝えておく。慣れるまでには、必ず困る部分がある。これを子供目線で教師に伝える。教師も気づかなかった思わぬ不足部分が見つかるかもしれない。
そして、困ったら身近な大人に伝える。家庭での困り感は親に話すだろう。その際は、学校に一報いただけるとありがたい。

❹これが一番重要。【だめなものは　だめ】。つまり【ならぬものは　ならぬ】。
正義の全うは、真っ直ぐな気持ちのよい生き方を己で導き、切り拓くのである。

試行期間中、大きなトラブルどころか小さなトラブルすらなかった。
これは、これまでの学校生活と家庭生活を通し、子供に善悪の判断等の道徳基盤が備わり、道徳心が着実に育まれ、行動に結びついている証でもある。

また、今回の取組を機に、特別の教科道徳の授業で公共心・公徳心・善悪の判断・心の葛藤・正義感等に関わる題材を扱い、子供たちの道徳心を揺さぶるなど、タイムリーな授業が各学級で展開されている。大変ありがたいことだ。

ここで、もう一度、本取組を通した道徳心の涵養について述べておきたい。

１月 12 日（火）発行【校長だより◇ 登下校時の持ち物④】より抜粋

（前略）

方法の基本は、教科書等の用具を学校に置く【置き用具】である。

しかし、心配がないわけではない。

そこで実施に際し、3 学期始業式の式辞の中で「実施の意図」と「方法」、そして「注意点」について子供たちに話をした。

特に重きを置いたのは【注意点】だ 。

『自分たちの生活は、 自分たちで守る』

『自分たちの生活は、自分たちでよくしていく（向上させていく）』

『自分たちの権利は、自分たちで守る』

『注意すべきことは、自分たちで声をかけていく』

『学校や学級の安全は、自分たちでできることを行って保守する』

いわゆる【自治】と【自浄】である。

置き用具については、見直しが行われていない学校が多い中、すでに常磐中学校は昨年度から実施している。多目的の指定カバンはあったが、生徒に任されて完全自由化されるなど、市内でも先進的だ。

本校の児童は基本的に常磐中学校に進学することから、今のうちに「自分で判断する」ことを習慣づけることは、スムーズな移行につながる。

さらに、道徳心を高め、自治力と自浄力を向上させることは、【 生きる力 】となって人生を支えていくことになる。

（後略）

目指すべきところは【自治】と【自浄】である。

そして、この２つの根にあたる部分が【善悪の判断】

【正義感】

【公共心】と【公徳心】。

コロナ禍（緊急事態宣言下）において、

日本人が、今こそ見直さなければならない「目に見えない大切な部分」なのである。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

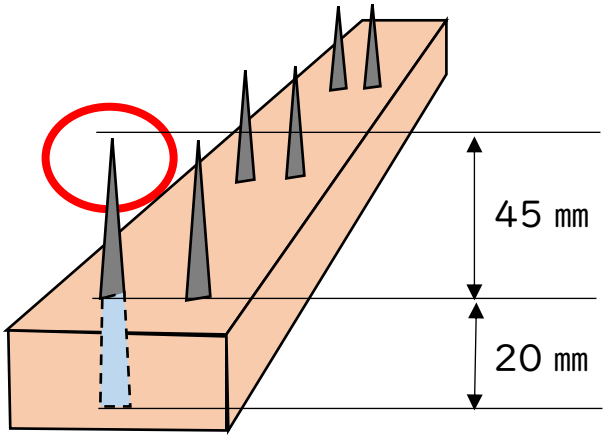
令和３年２月１２日(金)

◇ 秘密兵器❷

秘密兵器の続編である。

「根こそぎ君」と名付けた秘密兵器は、進化している。進化とは、改良である。
校務員の山田さんの手によって改良が加えられた「㊨根こそぎ君　NEO(ネオ)」。
「㊨根こそぎ君　NEO(ネオ)」は、真の【救世主】になるかもしれない。

秘密兵器の改良について説明しよう。
右のイラストをご覧いただきたい。



角材に 65 ㎜の長さの木ネジをねじ込む。
角材の厚みが 20 ㎜程なので、先端が 45 ㎜ほど突き抜けた状態になる。（赤〇）
イラストでは 6 本だが、実際には 20 本程度になる。
これをひっくり返し、「根こそぎ君」に装着したものが「㊨根こそぎ君　NEO(ネオ)」である。

軽トラックにつないで走行させれば、「木ネジの尖った先端部分が芝系雑草の根に引っ掛かり、根を分断して成長を止める」のがねらいだ。

もともと金属製の丈夫な爪（赤〇）は付いているのだが、商品の目的があくまでも地均しであり、除草をねらいとしていないため、除草効果はそこそこあるといったところだ。

そこで、改良を加えるという手法に至ったのである。

▲改良前の「根こそぎ君」
赤〇が元々ある金属製の刃

ところで、冒頭で説明した追加改良した部分。分かりやすい写真ではなく、イラストとしたのには理由がある。（裏面へ）

下の写真が重しを載せて 2 時間ほど走行した後の「㊨根こそぎ君　NEO(ネオ)」である。

左の写真が全体像、右の写真は、細部がよく分かるように寄ったものであるが、ネジらしき突起は見当たらない。
右の拡大写真をよく見ると、赤〇内に折れ曲がったネジが確認できるだろうか。丈夫なスチール合金のネジが直角に折れ曲がってしまっている。これはまだいい方で、半数のネジは根元から完全に折れてしまっている。

地中で張り巡る芝系雑草の地下茎に、完全に負けてしまったということである。

そこで、グラウンドの隅を 1 m四方に掘り起こしてみて、びっくり仰天。
地表から深さ 10 cm程の所まで、まさに地下茎が網目状に隙間なく張り巡らされた状態であった。正直、ここまでびっしりと根が張った状態は想像していなかったので、本当に驚いた。しかも、下方に行くほど根は元気。
金属製のネジが曲がったり、もぎ取られたりするわけである。

しかし、グラウンドを掘り起こしてみて、新たな収穫もあった。
地下茎は横に伸び、10 cm以上は下方に成長していかないことだ。それから東門付近の状況を見ると、雑草はまばらであることにも気づいた。
東門から出入りするのは人ではなくほとんどの場合が車両である。しかも、頻繁に車両の出入りがあるのではなく、保護者が来校し、グラウンドを駐車場として開放するなどの限られたごくわずかな場合でのみ。つまり、放置しなければ何らかの効果はあるのだ。深さ 10 cmは、あせらず徐々に対応してゆけばよい。

新情報を得て、「㊨根こそぎ君　NEO(ネオ)」には、再改良を加える予定である。
ネジの長さを短くし、その代わりに本数を増やす。さらに、重し重量を調節して過度の負荷がネジに掛からないようにする。
やってみてダメなら、また再改良を加えればいい。

冬の成果は春に現れる。雑草に負けない粘りで頑張ろう。

常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和３年２月１２日(金)
その２

◇　【検討中】来年度からの部活動に関わる対応について❶

現在は「陸上・水泳部」として活動している本校の部活動を紐解いてみた。

現在の方針で活動に至るまでの転換期は２度ある。
初めは平成 26 年度（6 年前)、夏の大会をもって男子ソフトボール部が廃部。続いて平成 28 年度（４年前）に、夏の大会を境に女子バレーボール部が廃部となり、現在に至る。

この背景には、部活動運営の柱となる「児童数」がある。
児童数は、平成９年度の 149 名から右肩下がりで減少し、6 年後の平成 15 年度は 101 名、さらに 5 年後の平成 20 年度には 58 名と、およそ 10 年で１／3 となる。この傾向は続き、平成 27 年度には 50 名を割り、それ以降、本年度までの間、45 名～49 名で推移している。廃部検討にはもちろん反対の声も少なくなかったようであるが、こうした実態を分析するに、当時の決断は妥当であったとの見解が下せる。

対して、今後６年間（令和３年～８年度）の児童数は、来年度の 49 人の最多を境に減少し、令和７年度からは 30 人台に入っていき、この状況が続くと予想される。幸いなことに、令和８年度まではどの学年も複式学級は避けられる見込みで、各学級に学級担任を配置してきめ細かな教育を展開できるものの、学校は諸活動運営に際し、時代に即した、タイムリーかつ適切な対応を図る必要に迫られている。その第一が部活動である。

では、来年度以降の「部活動運営の考え方」について、具体的に述べていく。

基本的に「陸上・水泳部」の形はそのまま残す。
特化するのではなく、複数の競技を経験させることは、小学生時期の子供たちの体力向上の観点からとてもよいことである。
よって、転換する点は【実施方法】となる。

まずは、「陸上」と「水泳」の運動特性について分析していく。

「陸上」は、競走種目だけではなく、跳躍、そして投てき、各種リレーと幅広い種目がある。走ることだけに特化しても、短距離と長距離、そして競歩、ハードル走など、やはり幅広い。「ハードル走」では、短距離では全く歯が立たなかった者が、ハードル越えのこつさえつかめば、肩を並べるどころか優位に立てることすらある。短距離走では、小学生に負けてしまうマラソン選手もいる。私も走るのは全く得意ではないが、ソフトボール投げやハンドボール投げは自信があった。
つまり、「陸上」は「体力や体動に適した種目に出合わせれば何とかなるし、子供に目標や希望をもたせやすい競技」ともいえる。

対して「水泳」はニュアンスが異なる。
得意と不得手に二分化・二極化される。
他はダメだが、平泳ぎだけなら何とか…というのは聞いたことがあるが、平泳ぎと背泳ぎ、バタフライは抜群だが、クロールだけはからっきし…なんていうのはあまり聞いたことがない。
水中での体の保持（水に浮く）の感覚習得が全ての鍵を握る水泳だけに、これができないと本当にやっていて苦しい。これが、いわゆる「カナヅチ🔨」である。
さらに不得手な者には、恐怖心が加わるから厄介だ。不得手に拍車をかける。

その点、授業の水泳には特性を配慮した工夫がある。個々に目標をもたせ、ゲーム要素を盛り込むなどして楽しみを失わせないように指導している。学校のプールもいい。不得手な子供を考慮した短水路であり、段差も付いている。
それから、昔あった「25m を泳げない者は赤帽」のような、見て識別するマイナールールがなくなったのもいいことだ。泳げない子を判別して安全確保なんてとんでもない。本人からすれば、恥ずかしくて、たまったもんではない。

あくまでも解釈は私見。よって、水泳を根本から否定しているわけではない。
私の体験と記憶なのだ。

さて、本校の児童は、大中規模校のように部活動を選択できない。水泳と陸上が大好きならまだしも、両方とも苦手な子供への配慮が大切となる。運動が苦手な子供を救う方法は、練習・大会出場とも、気持ちよく取り組ませることである。

部員数が少ないと、運動の得手、不得手にかかわらず学校代表として大会に出場しなければならない場合も生じる。これがマイナス経験にもなりうる。
やはり、配慮が必要だ。　公の恥は一生の心の傷となる。

<❷に続く>